

ヒロシマ・ナガサキ70年から、チェルノブイリ30年・フクシマ5年へ

チェルノブイリとフクシマを結んで

ひろげよう！支援・交流

フクシマを「核時代の終わりの始まり」に！

今年にはヒロシマ・ナガサキ原爆被爆から70年を迎えます。そして来年はチェルノブイリ原発事故30年、フクシマ原発事故5年です。また来年は、私たち「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」発足25年でもあります。私たちは、この「節目」の時期を、四半世紀にわたる「救援関西」の活動を振り返り、多くの皆さんとともに、次の活動につないでゆけるような2年間にしたいと考えています。

私たちは「ヒロシマ・ナガサキとチェルノブイリを結んで」「繰り返さないで、チェルノブイリ」を合い言葉に、1991年にチェルノブイリのヒバクシャとの連帯・支援の活動を始めました。しかし、フクシマで重大事故が起こる前に日本で原発を止めることができなかった…。フクシマ事故からまる4年が経過しようとしている今、被災地での課題は未だ山積み状態です。それにもかかわらず、被災地の実情が全国にはほとんど報道もされなくなり、各地の原発の再稼働が強行されようとしています。そのような中で私たちは、フクシマ事故の被害としっかり向きあい、改めて「救援関西」の活動の意義と課題を整理し、チェルノブイリとフクシマの被害者への支援・連帯を広げ、フクシマを「核時代の終わりの始まり」にすることをめざしてさらに前進したいと思います。



ベラルーシの子どもの描いた絵

このような思いで、昨年12月の「救援関西・発足23周年の集い」では、今年取り組みとして以下の提案がなされました。今後の運営会議で話し合いながら、具体化していきたいと思います。今年もどうぞよろしくご協力お願いします！

1) 4月「チェルノブイリ原発事故29周年」に取り組みましょう。

- ・4月26日前後に、対関電申し入れ行動を呼びかけ取り組む
- ・4月5日「チェルノブイリ事故29周年の集い」（計画中）
 - 「ヒロシマ・ナガサキ70年から、チェルノブイリ30年とフクシマ5年へ」1年間通じての取り組みの第一歩として、課題を整理し議論を深める。
 - 「救援関西」代表の長崎被爆者・山科和子さんの体験、活動、思いを、「被爆70年」に改めて受け止め、若い世代の人々とともに受け継いで行く

2) 引き続き、チェルノブイリ支援に取り組みましょう。

- ・「ノボ・キャンプ」へのベラルーシの子ども達の参加支援
- ・現地調達を主体に、現地のニーズにあわせた支援

3) フクシマ支援・交流に取り組みましょう。

- ・フクシマ事故被災地の子ども達の「保養支援」への協力
- ・「カーちゃんのカプロジェクト」のサポーターを関西で広げるなど、被災地の人々自身の活動への協力
- ・国の責任を問い、被災者への支援策を求める運動への協力
 - 「甲状腺医療費支援を求める」賛同署名
 - さらに「健康手帳」交付（無料検診と医療、生活支援等）を求める運動

4) フクシマ被災地と関西との交流を深め、被害の実相を広く伝えてゆきましょう。

- ・フクシマ事故で被災した方々を関西に招いての講演、交流会の企画など
- ・フクシマ訪問、交流

5) チェルノブイリ被災地の実情をリアルに正確に伝えフクシマ支援に活かしましょう。

チェルノブイリ被災地との長年の交流をふまえ、チェルノブイリ被害（健康／社会経済／文化）や現地での国の対策、地域での努力などの経緯と実態をより詳細にリアルに知り、より正確な情報を日本で伝えていく。それをフクシマ支援にも活かす。

6) チェルノブイリとフクシマとの交流を進めましょう。

7) 国連科学委員会（UNSCEAR）、国際原子力機関（IAEA）をはじめ、原発、核エネルギー利用を推進する人々による、チェルノブイリとフクシマ事故の被害過小評価への批判を強めましょう。被害者とともに、支援者、反核・反原発、人権擁護、環境保護、等、広範な運動に取り組む人々と連帯し、このような動きを跳ね返してゆきましょう。

8) 原発再稼働に反対し、脱原発と再生可能エネルギーへの転換を求める取り組みにも、積極的に参加しましょう。

（振津）

「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」発足23周年の集い

チェルノブイリ・フクシマを繰り返さないで！

大地震・津波・そして原発事故

“フクシマの想い・命の大切さを伝えたい”

2014年12月14日、西宮市民会館で、「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」発足23周年の集い」を持ちました。

震災から3年半たっても、福島第一原発の事故処理は困難を極めています。大量に放出された放射能汚染により、被災地では放射能と向き合う生活が続き、問題は山積んでいます。それなのに、すっかり忘れたように原発の再稼働が画策されています。私たちの合言葉は、チェルノブイリ・フクシマを繰り返さないで！です。今年は、福島



福島県猪苗代町の医師今田かおるさんをゲストにお招きし、大地震・津波、そして原発重大事故を経た、福島の想い・命の尊さを考える集いとなりました。

まず山科代表の挨拶を司会が読み上げました。

ついで事務局・振津さんから今年の活動を振り返り、来年の取り組みに向けての報告（前の記事参照）があり、その後11月中旬に「救援関西」のメンバー「おばちゃん」4人組の福島「交流の旅」報告をパワーポイントを使って行いました（ジュラブリ98号参照）。休憩をはさんだ後で紙芝居「命のつぎに大切なもの」を長沢由美さんの語りで演じました。本来は作者でもある福島県相馬郡在住の村上美保子さんに語っていただく予定でしたが、降って湧いた「衆議院選挙」のために急きょ来阪できなくなりピンチヒッターでした。途中、パソコンのトラブルがあったものの紙芝居の内容といい、その語りといい、その世界に引き込まれ、思わず涙し、

命の重さを考えさせられるものでした。そして福島県猪苗代町で診療活動をされている医師・今野かおるさんのお話が続きました。



当日夜、神戸ルミナリエに。
阪神・西宮駅前



「救援関西」代表、山科和子さん（長崎・被爆者）のメッセージ

皆さま

ご苦労様でございます。

お陰様で「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」は 23 年間やってることができました。皆さまが一生懸命頑張って、お力の限り尽くしてくださるからこの会が長持ちしており、ありがたいと思っております。

戦争をしない国でありますように、皆さん、頑張ってください。

私は戦争で、弟・妹がどこで死んだか分かりません。両親だけは家の焼け跡で見つかったのですが、原爆に直接やられ、目の玉もなければ、頬の肉もなかった残酷な死体でした。

私も 93 歳になりますが、いつまでも生きて頑張らなければならないと思っています。呼ばれば出て行って、子ども達に私の被爆体験を話しています。戦中、戦後の苦しかった生活の話をしてしまうと、子どもたちは戦争の事が分からないので、「おばあちゃんのうちは貧乏だったの？」と、素朴な質問が返って来たりもします。でもそれをきっかけに、戦争をしてはいけないこと、平和の大切さ、二度と被ばく被害を繰り返してはならないことなど、いろんな話しをすることができます。それだけでもありがたいことだと思っています。本当に子ども達に伝えることができるのは嬉しいことです。

皆さま、一緒に頑張りましょう！

2014 年 1 2 月 1 3 日



今田かおる先生のおはなし 「福島で生きるという事」

今田先生は、元々の診療のポリシーと日常生活、震災直後に起こった事、その後の葛藤や選択、人々とのつながりと今の活動を、一つ一つ自分自身に語るように、胸の内を開くように、話してくださいました。

【命と向き合って】

大学病院や県立病院勤務後、1991年猪苗代町の実家の医院に戻り、老人介護施設・訪問ステーションを立ち上げ、緩和ケアに力をいれた訪問診療を行っていた。震災前はベッド数15床の有床診療所であった。整形外科の院長と内科の私で月60人の訪問診療。週4日の外来、週一回の特別養護老人ホーム回診。15000人の猪苗代の町で、年20人～40人を診療所と在宅で看取っていた。在宅での看取りは55%。生きたくても生きられない癌の患者さん、胃瘻の注入で延命しているものの意思の疎通が図れなくなり生かされている方の生。生命とは何だろう？医療行為の支援するものは何か？ずっと問われてきた。人は思想信条・人生観・死生観など、個別で多様な人生の物語を生きている。それは関係する人々とのかかわりの物語として作られる。医療行為も個人の「物語の構築」を支援するものではないか？（命の物語）ということを考えていた。



【震災・猪苗代に3000人の避難者】

震災後、小さな町に浪江や双葉から避難者が約3000人。状況がつかめない中、震災翌日から診療開始。避難者の方々の衣服の放射能汚染の線量も分からないので、玄関ホールで診察をした。子供のことを考えると避難しなくてはと思ったが、患者が押し寄せ、そうもいかなかった。一日に200人位診ることになった。自分たちも怖かったが、避難してきた人々はそれこそ着の身着のまま。濡れた服で震えている。高血圧や糖尿病の高齢者は、すぐにも薬が必要だったが、「あの丸いピンクの薬」とか言うし、インスリンの種類も覚えていない。ガイガーカウンターが来たので測定すると、振り切れる。コートを脱いでもらったが、着るものがない。病院や役所にポスターを貼って「服を持ってきて」と集めた。

3月23日には避難所に往診に行ったが、必要だったのは、医療よりも食事だった。そこで、診察ではなく食事作りの手伝いをした。みんな毎日パンと冷たいおにぎりだけで元気がでない。休みの日には、温かいものを、避難者やボランティアと調理した。

迷った結果、弟（医師）一家は避難を決めた。放射能のことは知識もあったし、患者や地域の人々への責任もあるし、どちらの選択にも葛藤があった。自分は、何としても子供だけでも逃がしたかったが、子供たちはなかなか同意してくれなかった。いま読むのは恥ずかしいが、子供たちに手紙を書いた。次々に原発が爆発し、放射能がどう広がるか読めない時点で、切羽詰まって、いろんな覚悟をしていた、その時の思いです。

【愛する子供達へ】

愛する子供達へ

今、福島原発が大変なことになっています。第1・2・3号機と爆発がおき、放射能の被害が何年に渡って続くのか、何世代にも渡るのか、考えると心配で眠れません。弟家族は夜中の1時に九州へ子供達と出発しました。早く貴方たちも被害の少ない所へ避難させないといけないと焦っています。もしもの時のために思いつくまま書いておきます。

- *まず、兄弟は生涯仲良く助け合ってください
- *自分の夢をあきらめずに進んでください。そのために今すべきことはなにか・・・
- *社会貢献のできる人になってください
- *外見よりも中身を磨いて、そして腰の低い人であってください
- *整理整頓をしてください
- *食事はバランスよくきちんと食べる
- *自然保護と世界の平和を考えて行動してください
- *家族・祖先を大事にしてください
- *あなたたちの幸せが第一です。ずっとずっと愛しています
- *最後に、安全になって福島に戻れるなら帰ってきてください

【一日中手に汗をかく】

避難者もそれぞれの道を模索している。仮設住宅での健康相談会をしたり、浪江の人々と地元の人々で餅つき大会をしたり。一人ひとりが精一杯なのに、互いに支援の必要な人を気遣っている。市立小高病院の院長も被災者だが、南相馬市に仮設診療所を開くことになった。(小高病院は60人の入院患者を抱えていたが、20km圏内だったので誰も助けにきてくれなかった病院) 実は、院長自身もPTSDに苦しんでいる。

自分はといえば、毎日診療と被災者の支援で忙しく、普通に生活しているつもりであったが、寝ている時も手を握り締めて、一日中手に汗をかいていることに気づいた。無意識の緊張が持続していてとれない。それから、避難し、新生活を始めていた弟が元気がないと、その妻から連絡があった。うつになっていた。避難しない人のストレスだけでなく、避難した人も別のストレスにさらされている。

【ベラルーシ・甲状腺・IPPNW】

2012年12月、ベラルーシの医師の講演会に参加し、チェルノブイリ後のベラルーシの様子や、医師が政府からの圧力で自由に発言できない状況のことを知った。その後、ベラルーシを直接訪問し、事故後の小児甲状腺がんの増加状況、スクリーニングと患者情報の管理、健康管理の重要性を知り帰国。帰国後、子どもたちの甲状腺超音波を行う医師の資格をとることした。2014年3月、ドイツで行われた、核戦争防止国際医師会議(IPPNW)に参加。チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西の振津医師と交流。会議では、事故直後の経験を報告した。

現在、甲状腺の超音波検査の対象者が多すぎて進まないと言いつつ、甲状腺検査をする医師は福島医大の管理下で登録された医師のみがすることになっていること。医師はお母さんから、

説明を求められても、その場で話してはならないというマニュアルがあり、親は不安を募らせていること。検査結果が医大だけに管理されて必要な情報が与えられないことを、疑問に感じている。開示されている資料から、細胞診で悪性または悪性疑いの子どもの年齢分布をみると、16・17・18歳の人数が多く、受診率の低い高校生ももっと検査が必要で、18歳以上のボーダーの人々についても心配がある。

【仮設住宅訪問・近場保養】

今も仮設住宅でのイベントには毎回参加している。浜通りの高線量地域よりは猪苗代にいてもらいたいが、「こっち（会津地方）は雪が大変だから」と帰っていかれる方も多し。若い人々が、現金収入を得るために高汚染地での作業に従事することが多くなっている。事故のあった年には、高校体育連盟の屋外競技の基準は3.8マイクロシーベルト/時以下は平常通り？という無茶な通知がまかり通った。

事故後3年8ヶ月の福島の問題として①心配しながら福島に残っていることをどう思われるか②高汚染地で子育てしていったよいか③常に食べ物の線量を気にしなければいけない現実④のびのび運動できない現実⑤避難した人、避難から戻ってきた人との見えない壁⑥不安を口に出せないストレスがある。

国や政府・自治体に住民を被ばくから守る最低限の機能がないのは、どういうことでしょうか。全国から多くの人びとの心ある支援、保養のお誘い等、嬉しいこともある。

条件の悪い人も、近場で誰でも行ける保養を始めている。ペンション形式で障がいのある子どもも参加できる「猪苗代マミーズタミー」、養護学校での保養「のびのびいなっこハッピーアイランドフェスティバル」。ベラルーシでは、病気になる前に元気にする目的で、子どもは年に1～2回・24日間の保養が定められていると聞き、猪苗代でできることを考えている。

【人と人との関係を大事に】

最後に、命と向き合ってきたものとして、患者さんの言葉、川柳、大事なことを教えてもらった。命は大事。命はその人の人生の物語。命は関係する人びととの物語。

家族・親戚・友人・仲間と楽しむことを忘れずに。

（ゆみ）

<今田かおるさん プロフィール>

杏林大学医学部卒業。山形県中央病院で内科、外科、麻酔科の勤務を経て1991年に実家（猪苗代）の医院に戻り現在に至る。1998年よりブリスベンで老人医療研修後、猪苗代町マリアクリニック院長に就任。2004年に介護老人保健施設、2005年に訪問看護ステーションを立ち上げ、訪問診療開始。2011年東日本大震災、福島第一原発事故直後は、子ども達を県外へ一時避難させ、自身は猪苗代町で地域住民と浪江町からの避難者の診療にあたる。2014年福島県健康調査の甲状腺超音波検査認定医取得。現在、原発避難者支援、健康相談、低線量被ばくの健康影響を理解してもらうための講演活動等に取り組む。



《紙芝居》

「命のつぎに大切なもの」から

原作:村上美保子さん

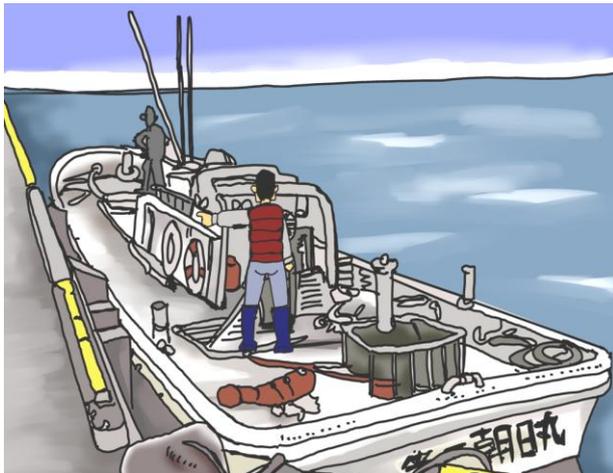
釣師浜の漁師は、船を守った。
そのおかげで十艘流されただけで、船は三十六艘も残った。
被災した浜でこんだけ残ったのは釣師浜だけだ。これは奇跡だべ。
俺たちが命がけで船を守ったんだ。

だども船が残って何になる。

原発事故で、魚一匹とることさえゆるされねえ。
魚を取らねえ漁師なぞ、もはや、漁師ではねえ
漁師って言われねえべ。



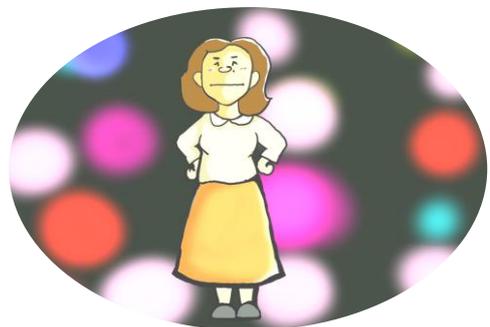
おらなあ、毎日、毎日、女房に手を合わせて謝っていっと。
「かんべんしてけろ。かんべんしてけろ」
毎日、毎日、泣いていっと。
悔しくて、悲しくて、苦しくてな……。



いつか、時間がたてばすべてを忘れるから
と、

人は慰めてくれる。
ほだども、俺は忘れねえ。
命のつぎに大事なものを、俺は間違った。

忘れてしまいたいげんど、忘れねえ。
忘れてはなんねえと思っている。



映画「へっついの家」とトークイベント

1月24日、須磨の家ふくふくで、映画「保養につなぐ大家族—むすんでひらくへっついの家」上映と製作者である関久雄さんのトークイベントと交流会があり、「救援関西」からも3人が参加しました。

映画では、福島の子ども達に思いっきり遊んでもらおうと佐渡の古民家を保養施設「へっつい（かまどの意）の家」として改装し、そこでスタッフ同士が文字通りぶつかり合いながら、福島の子ども達と大家族のような共同生活を築いていく様子が紹介されていました。その一步一步の積み重ねがとても重く大切に感じられました。印象に残ったことの一つは「原発ミーティング」でした。上映の後の関さんを囲んだ話し合いの中で関さんは話されていました。「これ（原発ミーティング）ははずせないことで、こだわっている」と。原発事故のために起こった様々なこと、悲しかったこと、困ったことなどを子ども達がそれぞれに口に出していく。その中で佐渡の人から良かったこともあるんじゃないのかと言われて「助けてくれる人がいたこと」と・・・。放射能や原発事故は子ども達にとっても非常にデリケートな問題で、保養に来てまでわざわざこちら側からは触れない等いろんな意見があると思われるなかで、このようなやり方もあるのかと思われました。勿論各グループがそれぞれの思い・やり方を大切にされて保養に取り組んでおられるのは当然のことです。頭が下がります。

映画の後、関さんは自作の詩を朗読しながら福島の現状やそこに住む者の気持ちなどを訴えられました。「だるま森+えりこ」さんによるBGMの調べにのりその言葉は胸に染み込みました。その中の一つの詩の中に「希望」という言葉がありました。私たちもまた「希望」であり一所懸命生きることが「希望」であると。福島の人々と私たち、お互いが「希望」となり得るようなそんな存在でありたいと思いました。私たちはチェルノブイリの被災地・ベラルーシの人々と長年交流を続けてきましたが、そのベースにあるのはお互いに支えあう関係、お互いに顔の見える関係を大切にすることです。その想いと通じるものを感じました。

「あなた方は希望であり、わたし達もまた希望です」

（原発いらない、命が大事の歌Ⅲ集 関久雄）より一部抜粋

福島に来られた 皆さん

あなた方は希望であり わたし達も また 希望です

ともに 手をたずさえ 支え合い

なつかしい未来を 創りましょう

「たこ焼きキャンプ」石井さんの手作りのカレーは本当に美味しかった！そして手作りのケーキもまた美味しかった！

小野様、たこ焼きキャンプの皆さま、手間暇をかけてこの会を準備していただき本当にありがとうございました。

（いのまた）

[2014年・会計報告]

・チェルノブイリ支援・交流

収入	カンパ	530430
支出	現地訪問：支援・交流	668431
収支		-138041
繰り越し		913236
現在高		775195

・保養支援

収入	カンパ	150600
支出	ノボキャンプ参加交通費	25295
収支		125204
繰り越し		0
現在高		125204

・フクシマ支援

収入	カンパ	250684
支出	福島カンパ	125627
	「ゴーワーク」カンパ	100000
小計		225627
収支		25057
繰り越し		304702
現在高		329759

・運営会計

収入	会費・カンパ	201000
支出	送料	125198
	紙・印刷代	55945
	ベラルーシバザー物品購入	31620
	その他	33540
小計		24630
収支		-45303
繰り越し		100276
現在高		54973

*チェルノブイリの被災地ベラルーシ現地への支援はジュラブリ98号を参照ください。

会費・カンパ納入／お礼とお願い

皆さまの心からのご協力・ご支援、本当にありがとうございます。

皆さまに支えられてここまで来ることができました。

今年是被爆70周年の節目の年です。代表である長崎被爆者の山科さんをはじめ被爆者の方々にも教えを乞いつつ、チェルノブイリそしてフクシマの被災者の方々とささやかではありますが、お互いに顔の見える関係を大切にしながら交流・支援を続けてきました。今年もさらに交流・支援を積み重ねていきたいと思っております。

「救援関西」は皆様のご協力・ご支援に支えられて成り立っています。これまでのご支援に感謝申し上げますと共に、どうか今年も物心両面にわたって更なるご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。



フクシマ原発事故被害者に対する医療支援への “第一歩”

国の責任で「福島19歳以上の甲状腺医療費無料化」を実現させよう！

賛同署名をさらに広げ、政府に迫りましょう！ご協力お願いします。

昨年から皆さんにご協力をお願いしている「福島19歳以上の甲状腺医療費無料化」を求める賛同署名ですが、福島と全国から8万4352筆の追加署名（2015年1月26日、累計：8万6634筆）が集まり、先日1月26日に、環境省・復興庁に二次提出し、対政府交渉（8団体呼びかけ）が行われました。「甲状腺手術や検査を受けなければならず、経済的負担も加わって、苦しい思いをしている人々がいる現実にいる。事故がなければ起こらなかったこと。原発を進めた国が支援すべき」と、福島県からの参加者の強い訴えと、全国からの多くの署名を背景に、甲状腺医療費支援の実現を迫りました。

昨年9月には福島県からも環境省に対し、「県民は、事故がなければ受けることのない甲状腺検査により、精神的・身体的に大きな負担を強いられるとともに、一部の県民には、検査の結果、診療等を要することとなり医療費の負担も生じています。」として「甲状腺検査の結果、生じることとなった診療等に係る医療費」について「経済的負担を解消」するよう施策を求める「緊急要望書」が提出されています。しかし、昨年末に発表された、環境省の「住民の健

康管理のあり方に関する専門家会議」の「中間とりまとめ」と「当面の施策の方向性」では、医療支援は一切触れられていませんでした。対政府交渉で私たちは、そのような政府の態度を厳しく批判しました。

対政府交渉で環境省は「県の要望に沿って、今予算の検討を進めている。」と返答しました。復興庁は「実際に手術をした方々とか、手厚くフォローが必要。支援していくことになると思う。」と返答。福島と全国から寄せられた多くの皆さんの声を、政府も無視できなくなってきました。

また、2月2日に福島県で開催された「県民健康調査検討委員会・甲状腺評価部会」でも、3月末に作成予定の部会報告に「甲状腺に係る医療費無料化を国と県に要請する」ことを盛り込むことで委員が一致したと報じられています。

さらに署名を広げ、福島県の「甲状腺医療費無料化」を（「手術をした人だけ」などの限定をされることなく）実現させましょう。フクシマ事故被害者支援を切り捨てようとする政府の施策に「風穴」をあけましょう。署名の次回集約は3月末です。周囲にぜひ広げて下さい。ご協力お願いします！

.....
1月26日の8団体呼びかけの「対政府交渉」の全体については、「ヒバク反対キャンペーン」のホームページをご参照下さい。

<http://www.jttk.zaq.ne.jp/hibaku-hantai/>

チェルノブイリ事故29周年の集い

ヒロシマ・ナガサキ70年から、チェルノブイリ30年・フクシマ5年へ
チェルノブイリとフクシマを結んで
ひろげよう！支援・交流
フクシマを「核時代の終わりの始まり」に！

日時：4月5日（日） 午後1時半～4時半

場所：大阪市立総合生涯学習センター 5階 第1研修室

*4月26日「チェルノブイリの日」前後に関西電力への申し入れ行動を予定しています。
こちらにも是非ご参加ください！

* 甲状腺医療費無料化要請／政府交渉報告・討論集会

日時：2月28日（土）午後1時半～4時半

場所：西宮市大学交流センター「講義室1」阪急・西宮北口の北側「ACTA 西宮東館」

主催：ヒバク反対キャンペーン

* さよなら原発 関西アクション（チラシ参照）

日時：3月8日（日） 10時～

場所：北区民センター及び扇町公園

主催：さよなら原発 関西アクション実行委員会

カンパ・会費の納入ありがとうございました！！

(2014.12.1～2015.2.8)

鎌橋照子 木下桂子 久保きよ子 曾我日出夫 振津かつみ 梅原桂子 齊藤充子 大西洋治
原発の危険性を考える宝塚の会 今田かおる 佐藤みえ 大久保利子 大久保利子 川辺比呂
子 富田洋香 崎山昇 松本郁夫 松本郁夫 長沢由美 鹿間桂子 門林洋子 村上玲子

ニュース発行:チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局

cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp

連絡先:〒591-8021 堺市北区新金岡町 1-3-15-102 猪又方

0722-53-4644

郵便振替:00910-2-32752

口座名:チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西